# ③ 横浜動物の森公園・よこはま動物園の建設事業について

■吉田哲夫・松嵜尚紀

1—はじめに
2—公園面積と候補地
3—よこはま動物園の動物種
4—管理運営組織
5—公園の整備手法
6—よこはま動物園の整備計画
7—計画と開園後

## 1—はじめに

横浜動物の森公園（旧都筑自然公園）は、昭和五十年前半に計画された。当時、緑政局は金沢自然公園の都市計画決定、事業認可、用地買収、事業着手と二番目の動物園事業に積極的に取り組んでいた時期であった。

このような時期に三番目の動物園の構想を立て事業化を図ることは奇異に思われるかもしれないが、当時の計画課長石井氏、計画係長の小泉氏の両氏は、緑の七大拠点の中核は将来にわたり確保されるべきとの発想により、七大拠点の中心に公園を設置する計画を立案した。

また、野毛山動物園園長北井氏は、野毛山動物園の北側斜面に位置する地形上の立地の問題や、世界の動物園展示方式が檻展示から、本来動物が生息していた環境で飼育展示する無柵放養方式に転換されているなかで、動物の飼育環境に適した土地への移転を考えていた。

折良く当時の市長（細郷市長）は、猛獣を飼育している動物園が広域避難場所である不適を指摘され、移転を指示した。

## 2—公園面積と候補地

市政百周年記念指定施設に指定されたのを機会に公園面積を百ヘクタールとし、受益者負担の原則に基づく有料公園にした。候補地の選定条件は、大規模な緑地（二百～五百ヘクタール）の中核となり、動物園として五十ヘクタール以上の用地を買収可能なこと。前記の条件より①円海山近郊緑地特別保全地区②川井・矢指　③舞岡地区　④こどもの国周辺　⑤三保・新治・都岡・上白根地区の検討を図り、周辺が広大な緑地があること、アクセス道路、地権者の協力、等を考慮し都岡・上白根を候補とした。

## 3—よこはま動物園の動物種

当初よこはま動物園は脊椎動物の全目展示を試みたが、世界で飼育経験のない動物が多く含まれていることや、経費節減の観点から、平成十一年に百五十種千五百点の展示に変更した。その後、百五十種の生態環境展示を行うには用地が不足することや、ボノボのように入手が困難な動物がいることから地域を特定した整備を行うこととした。（金沢動物園は百十二点の希少草食獣を展示する特殊動物園）

## 4—管理運営組織

夜行性動物や季節的に特異な習性を持つ動物の市民への公開や、動物を見せるだけの動物園ではなく、レストラン・ショップなどの魅力ある施設運営、ベビーカー、双眼鏡などのレンタルや、便益施設である清潔なトイレ等の提供を行うには、従来の管理方式では困難である。また、他の動物園では飼育職員が寝小屋の清掃や糞の処理を行っているが、よこはま動物園では、清掃職員との分業化により飼育職員がより動物の健康管理や来園者への環境教育に従事できる環境を整えた。こうした柔軟な市民ニーズに対応した運営は、緑の協会が担うところが多い。

## 5—公園の整備手法

金沢動物園を建設中に、よこはま動物園に着手した理由は主に前述した理由であるが、公園には、街区公園、近隣公園、地区公園、総合公園、運動公園、特殊公園、広域公園等の種別がある。公園種別は主に規模を表すだけで、公園の内容や性格を表現するものではないため、市民には非常に理解しにくい。そこへいくと、動物園と名が付けば公園規模の

大小に関わらず、市民には的確にイメージでき共通の理解が得られる。今後の横浜市の公園計画には、動物園のように、公園種別だけでなく公園の整備内容が明確に理解できる整備手法が重要である。

## 6 よこはま動物園の整備計画

### ❶動物園の役割

よこはま動物園の整備計画は、動物園の社会的な役割（表―1）を再確認し、それを実践できる施設づくりを目指している。

それは、来園者が、レクリエーション施設として満足し、かつ環境や動物について何かを感じとることができる施設づくりと、動物園が動物の調査・研究・繁殖といった専門機関として、活動するために必要な施設づくりの二つに大別することができる。

### ❷来園者に対するサービス施設・空間づくり

来園者に一日楽しんでもらい、何か、環境や動物について感じ取ってもらう動物園を実現するためには、動物園という非日常の別世界を作りあげる必要がある。

そのために、よこはま動物園の建設にあたり次の五つの骨格的な計画をしている。

ちょうどよこはま動物園の計画当時、昭和五十八年に東京ディズニーランドが開園した。動物園の先進事例の殆どが海外のため、植栽、ファニチャー、建物等による空間演出の実践例として職員の身近な手本となってきた。

**㋐緩衝緑地帯の整備**

動物園園内から、家や学校などの園外の風景が見えては、いくらここがジャングルだよといっても、来園者が実感することは難しい。

よこはま動物園の外周部を構成している緩衝緑地帯（幅約三十メートル）は、園内来園者の視線から周囲の街並を隠すことを主として、防音・防臭・防火機能を合わせ持つものとして整備している。この緑地帯には、造成工事に先だって、計画地に自生していた広葉樹約四千本が移植されている。構成樹種を潜在自然植生のシラカシ・タブにしているため、林内は暗いが安定したボリュームある緑地帯を形成している。

時期開園区域では、コスト縮減の観点から経費のかかる移植を見直し、既存樹木はチップ化して再利用を図っている。

※潜在自然植生

その土地で、人間の影響がなくなったと仮定したとき、成立が予想されているだろう植物。

**㋑管理動線の分離**

動物園は、他の公園に比べ、管理職員の移動や、搬出入業者の出入りが多い施設である。これが来園者と交錯することは、来園者の安全確保で問題になることはもとより、裏舞台を見せられているようなもので興ざめとなってしまう。

このため、来園者の歩く園路とは別に、管理用道路（幅六メートル）を整備しており、日常管理とともに、救急時の移動動線や、電気・ガスなどライフラインの埋設道路としている。なお、都市公園で完全に管理動線を分離している事例は極めて少ない。

**㋒テーマゾーンの設定**

園内は、例えばアジアの熱帯林ゾーンなど、動物の生息する気候帯ごとに六つのテーマゾーンを設定し、整備を行っている。各テーマに沿った形で、来園者のいる観覧空間・動物のいる展示空間・背景となる緩衝緑地などの修景空間を一体の風景となるよう整備を行っている。

整備手法としては、雰囲気を出すためにテーマとなる気候帯をイメージできる植物を植え、動物舎や擁壁などの構造物は、できるだけ隠すとともに、隠せないものは、擬岩・擬木・植物等で遮蔽している。これにより、来園者があたかもジャングルに迷い込んだり、亜寒帯の森を散策しているような錯覚をする空間づくりが可能となっている。

計画初期では、例えばサルの世界といった、動物の分類学毎のテーマゾーンを設定していた。それが社会状況の変化と経費節減の観点から、動物のすむ気候帯がテーマとなり、次期開園区域では、もっと絞り込んだ一定の地域をテーマとする方向で計画を進めている。

これは、地域を限定することで、現地にすむ動物と環境をより臨場感ある個性的な空間として擬似再現でき、かつ経費的にも節減できるからである。

**㋓展示ストーリーと環境演出サインの導入**

よこはま動物園では、来園者が動物を見ながら園内を移動する際、退屈をしないように、主園路に沿ってインド村から密林へ、また森から海へというような展示ストーリーを設定している。これにより、空間構成のメリハリ

**表―1　動物園の社会的役割と計画の方向**

| 動物園の社会的役割 | 計画の方向 |
|---|---|
| 1 レクリエーション<br>2 （環境）教育・普及 | 来園者に対するサービス施設・空間の創造 |
| 3 調査・研究活動<br>4 保護・繁殖活動 | 動物園の社会的な基礎活動が可能な施設の設置 |